
被災地の医療コーディネートシステムをどうするか？

—新潟県（新潟県中越沖地震）と宮城県（東日本大震災）での経験から

（内藤万砂文ほか、日本集団災害医学会誌 17: 125-129、2012）

2016年1月15日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

2004年、新潟県中越沖地震が発生し、比較的被害の少なかった長岡市は隣接した山古志村が壊滅的な被害を受けたため、その村民の避難先となった。およそ2カ月間にわたる医療救護を長岡赤十字病院が担当し、他にも多くの避難所が長岡市に開設され、多くの支援医療者が長岡市を訪れた。しかし、避難所に複数の医療班が支援に入ることにより、①治療方針が医療班ごとに微妙に異なる、②同じ質問が繰り返される、③一方で医療班の支援が全くない地域が存在する、④避難所の窓口が一本化されておらず、誰に声をかけてよいのかわからないなどの問題が発生し、被災者を混乱・疲弊させる結果となった。

これらの反省から2006年9月、新潟県福祉保健部は災害救護マニュアルの改訂を行い、「災害医療コーディネーター」を配置し、それを保健所長が担うことを決めた。災害医療コーディネーターとは被災地での医療救護の窓口として、被災状況等の情報収集・提供や医療全般にわたる要請に対応するとともに、関係機関との連携による災害医療の企画・調整を行う者のことである。

2007年の新潟県中越沖地震においては医療者ミーティングが開催され、医療コーディネーターである保健所長は保健師と連携し、避難所情報、医療ニーズを集約し、支援医療班の大多数が参加するミーティングの場で情報共有をし、業務調整を行った。その結果、多くの人の支えもあって、参集した延べ380チームもの救護班が混乱することなく活動することができた。しかし一方で、コーディネーターの仕事内容は多岐にわたり、医療班の業務調整のみならず、各種要望やマスコミへの対応など多種多様な役回りに振り回されることとなった。その結果、本来の保健所業務が行えないという弊害がみられた。

そして2011年に、東日本大震災が発生した。被災地となった宮城県では6圏域の基幹病院医師を災害医療コーディネーターに指名し、石巻圏域では石巻赤十字病院医師がそれを務め、本部が同病院内に置かれることとなった。圏域では唯一被災を免れた高次機能病院として多数の傷病者の対応に追われ、災害医療コーディネーターの役割をも併せ持つこととなったのだ。さらに、この災害では市役所などの行政機関の多くが甚大な被害を受けたために、保健・衛生・介護などの医療を取り巻く問題も災害医療コーディネーターが担当することとなった。多い時には1日に60チームの医療班が全国から入り、医療情報の集約と業務調整にコーディネート本部は多忙を極め、混乱した。しかし、石巻赤十字病院は医療コーディネーターを全面的に支援し、事務職員2名と秘書を専従

で配置させ、また全国の赤十字から医師、看護師、事務やボランティアなどが集結し、本部サポートチームが結成されるなどして、医療コーディネーターのリーダーシップのもと、延べ 3600 チームを超える医療班が、避難所での救護活動を大きな混乱なく展開することができた。

前述のように、医療コーディネーターは欠かせない存在となってきた。それを誰が担うかは地域の事情で決まり、保健所、行政、医師会や基幹病院などさまざまな選択肢がある。いずれにしても、重要なことは多機関との連携を図ることである。また、先ほどの東日本大震災の際に、行政機能が長期間麻痺すると、保健・衛生・介護などの医療を取り巻く環境が整備されず、災害医療が一步も前に進まないことがわかり、災害時の行政との連携も重要であることが分かった。新潟県では行政マンでもある保健所長がコーディネーターを務め、うまくこれが機能した。行政がプレイヤーを務めたという意味でこれは大変意義深い。長岡赤十字病院では 2006 年から保健所関係者の災害医療研修も担当することとなり、保健所単独の研修と災害拠点病院との合同研修の 2 回の研修会を行っている。このような研修を継続的に行うことで保健所職員の災害医療に対する知識やモチベーションが確実に向上し、さらに保健所と病院、消防が連携した災害訓練が新潟県内各地で積極的に開催されている。

東日本大震災での医療救護経験を踏まえ、厚生労働省は 2011 年 7 月から 4 回にわたり「災害医療等のあり方に関する検討会」を開催し、そこで医療提供体制における医療コーディネート体制の整備方針が提示された。このように、災害時の医療コーディネートの重要性が強調され、国からの方向性が示されたことで、今後全国都道府県で体制整備に向けた議論が進むものと思われる。

今回この論文を読み、東日本大震災などの際に医療がどう動いているのかについて初めて考えることができた。災害は今後必ず起こるといってもいいが、それに対する準備はやはり実際に起こった場合でないとわからないことも多いだろう。そういった場合、今回のように過去の事例について反省し、次に繋げようとすることはとても重要なことだと思う。こういったことを繰り返しながら、日本の医療体制はよりよい機能を持ったものへと進化していくのだろうと思った。